慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160－8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211　内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　末舛　惠一
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間／午前9時～午前11時
●電話（3353）1211（大代表）

平成十六年 新年祝賀式典開催

変革の時を迎え医学部の活性化への期待

平成十六年新年祝賀式典が一月五日新棟十一階大会議室において開催された。昨年は学内外において種々の問題発生の影響もあって医学部・病院の諸体制が多様に変革されたが、本年はそれら諸改革が軌道に乗って活性化への方向が示されるとの期待が大きく、塾長、学部長、更には職員代表の挨拶にもそれらを示唆する言葉が織り込まれていた。

恒例となった新年祝賀式典では、特に若手教室員が少数派となり果てて以来久しい。今年は塾長、学部長の挨拶に述べられている様に昨年行われた諸変革のうち、特に病院経営ボードによる成果が問われる年である。又学部長は新しい卒後研修制度の発足が教室と病院診療面への影響もさることながら教育・研究面への影響について遺憾なき様その対策に注力して諸施策を実施していることを述べていた。職員代表はその挨拶の中で戦後の学閥紛争による混乱の時期に言及し今後の充実発展への期待を述べていたが、参会者はこの点について特に注目を注いで傾聴していた。

式典終了後別室において懇親会が行われたが、開始にあたり相川院長は〝正に嵐の中に立って院長業務をお引受けした。今力をつくして慶應病院の維持発展に努力する覚悟〟と挨拶の言葉を結び全員の拍手喝采を浴びていた。

新年祝賀式において賀詞を述べる安西塾長

幼稚舎生による「福澤諭吉ここにあり」のコーラス
（福澤先生誕生記念会）

第169回 福澤先生誕生記念会

三田西校舎ホールにて挙行

第一六九回福澤諭吉先生誕生記念会が、三田キャンパス西校舎ホールにて挙行された。会は十時半の定刻に始まり、幼稚舎生やワグネル・ソサイエティーによる合唱に続いて安西塾長が年頭の挨拶を行った。挨拶の中で塾長は慶應義塾二十一世紀グランドデザイン（総合改革プラン）に言及し、うち慶應病院の経済改革計画について「慶應病院が日本の病院を先導する上で不可欠であり、慶應の経済上、不回避である。これに尽力くださった信濃町キャンパス関係者諸氏に感謝したい」と述べ、慶應病院改革を含む経営改革の必要性を改めて強調した。また、昨年九月をもって閉院した伊勢慶應病院についても述べ、長年にわたり伊勢慶應病院をささえた関係者への感謝の意を表した。このほか、八年後に義塾創立一五〇周年を迎えることについて「国際水準での教育・研究の質の向上が一五〇周年に向けて必要であり、未来への先導を勧める」二十一世紀福澤塾の出発点とするため、一五〇周年の年を皆で力派に迎えるための一年目としたい」と、一五〇周年を目標として義塾の改革を進める方針を示した。

塾長の挨拶に続き、「三田山上の思い出」と題して、全義塾評議委員会議長、神谷健一君による記念講演、福澤家代表として福澤範一郎君の挨拶、また「小泉新祝相全国高校生小論文コンテスト」受賞者の表彰があり、最後に塾歌を斉唱して閉会となった。記念会は定員八百名のホールが満員となる程の盛会であった。参加者の多くはこの後、学生食堂ホールにて新年名刺交換会に参加した。

「武見太郎記念国際シンポジウム」を終えて

標記シンポジウムは、平成十五年十二月十三日、武見太郎先生没後一〇年を記念して東京国際フォーラムで開催され、参加者千名を超え、盛会裏に終了した。今回のシンポジウムにあたり、実行委員の一人として活躍した高田　昂北里大学名誉教授（衛　専3）は次のように語っていた。

高田名誉教授の話　本シンポジウムのテーマは「Human Security and Health：安全保障の視点から一人類の生存秩序と健康」と題し、武見先生が生前提唱された生存秩序の理論的概念である「生存の理法」を基盤として、人類の生存秩序を安全保障と健康という世界的、今日的課題として提起したものであり、三部構成で講演とパネルディスカッションが行われました。第一部は、「Human Security の理論と実践」について、ノーベル経済学賞受賞のアマルティア・セン教授、第八代国連難民高等弁務官・現国際協力機構緒方貞子理事長、エンマ・ロスチャイルド・ケンブリッジ大教授、リンカーン・チェン・ハーバード大教授、司会は、山本正国際交流センター理事長。第二部は、「よりよき生存とは？―武見太郎の今日的意義」について、マイケル・ライシュ・ハーバード大教授、エズラ・ヴォーゲル・ハーバード大教授、居芳茂WHO西太平洋地域事務局長、司会は、東海大教授・武見敬三参議院議員により進められ、一部、二部は参加者からの質疑を交えて各パネラーからの魅力的な討論が行われました。第三部は、「伝統医療とよりよき生存」について、寺澤捷年富山医科薬科大副学長、チエン・ケン南大平洋WHO代表、丸山征郎鹿児島大教授、司会は、大谷藤郎国際医療福祉大総長が務められました。以上のような国際的に著名な内外の学者によるパネルディスカッションにより人間の安全保障と保健医療のあり方に関する今後の方向が示されたことは真に意義深いものでありました。本シンポジウムの開会の冒頭に武見賞が小林登東大名誉教授、武見特別賞がハーバード大のリンカーン・チェン及びマイケル・ライシュ両教授に贈られ、橋本龍太郎元総理大臣より来賓挨拶があり錦上花を添えることができました。この国際シンポジウムの準備から開催にあたって、福井光寿（外　29回）実行委員長、坂上正道（小30回）と小生他六名の実行委員を支えていただいた坪井栄孝日本医師会長、北島政樹医学部長、木舛惠一三四会会長をはじめ、都道府県医師会、日本製薬団体連合会等関係諸団体ならびに三四会諸兄姉の強力な御支援を得たことに深甚なる感謝の意を表する次第です。なお、このシンポジウムは、NHK番組として本年一月三十一日（土）二十三時三十分～二十四時四十分、教育テレビ・十曜フォーラム「ヒューマンセキュリティ、人類の生存秩序と健康」として放映されますので是非観て頂きたいと思います。

（北里大学名誉教授　衛　専3）

落穂

新年早々の話題としては暗い話で残念であるが、マッチングプログラムも終了したが、この制度はそもそも見切り発車ではなかったか。その理由は八月に決まるといわれていた予算がこれを書いている時点ではまだついていないからである。予算の見込みなしにやることに決めたのでなければよいが。結果論であるがインターン制度を廃止せずに改革すればよかったのではないか。廃止になったのは有意義なインターン制度を過ごした医師が少なかったために存続を擁護する声がとどかなかったのか、身ない。今後、外国のように一般医（米国のGP）を増やそうというのが狙いであるなら、この研修医制度が最善の策であろうか。慶應病院でマッチングの結果三十四人の欠員がでた理由はどのように分析されたのであろうか。想像であるが、研修医に診療されることに慣れていない。そのための混乱も懸念される。また、大学病院の財政の立場から見ると、国の補助金の額によっては給与に一億以上の予算が必要となり、赤字が増えることになる。研修指導者に対する報酬や教育設備にも費用が必要であり、この点についても要求は出されていたが、回答はまだない。

（E）

卒後研修制度を再考する

標記の制度は二年間のインターン制度をとっていたが、医師不足のために廃止され一年になった。このことからみると、今回の制度は医師数の抑制にも、若干の医療費の抑制にもなっているとも思われる。プライマリーケアの教育の重要性は認めるが、強調されすぎていないか。我が国ではプライマリーケアの標榜もできず、一部の病院で総合診療科があるが専門医はすべて、福井光寿（外　29回）実行委員長、坂上正道（小30回）と小生他六名の実行委員を支えていただいた坪井栄孝日本医師会長、北島政樹医学部長、木舛惠一三四会会長をはじめ、都道府県医師会、日本製薬団体連合会等関係諸団体ならびに三四会諸兄姉の強力な御支援を得たことに深甚なる感謝の意を表する次第です。なお、このシンポジウムは、NHK番組として本年一月三十一日（土）二十三時三十分～二十四時四十分、教育テレビ・十曜フォーラム「ヒューマンセキュリティ、人類の生存秩序と健康」として放映されますので是非観て頂きたいと思います。

（北里大学名誉教授　衛　専3）

論壇

三四会活動の現状と将来

三四会会長　末舛　惠一

本当に時の経つのは早いこと。もう平成十六年です。皆々様明けましておめでとうございます。とうの昔に決着する筈のイラクも片がつかないように、何となく気の重い年の始めです。でも日本は矢張り新しい年の、新しい思い入れで皆様と一緒に お芽出とうございますと二〇〇四年をお祝い申し上げます。

我々の三四会はこの一年、例年の様に一ヶ月に一度の新聞発行が表看板で、この頃は四面、六面と情報も広くなっています。32回卒の石山和夫君が主で、数名の広報係スタッフと共にその渉外、編集、発行を力を合わせてやっています。また医学部新聞研究グループの学生諸君も、取材、編集活動を行っており、その成果は既に記事として数多く掲載され紙面の充実に重要な役割を果たしております。

更に古くからのホテル主は、赤倉山荘担当の内匠昭君33回生。長く山荘のいわゆる番頭をやって、宿泊客の客寄せの企画から、客輸送の手配、更に送迎車の面倒、更には温泉水のレジオネラの対応まで。山荘の為なら何でも内匠君です。冬はスキーの集客、バスの手配、その他の季節は、三田の各学部のゼミを招いたり、八面六臂の活躍です。若い人達への賞―三四会奨励賞も4回を迎え、若い学生の夢をかき立てる大切な企画です。昨年は、特に社会活動関係の演題ではどうしてもメンバーの中に四十歳超の人が入ってくる可能性もあり、この辺りは担当の矢部裕君（36回）のアイデアもあって手直しを試みている所です。なお、表彰式の時に矢部君が名を呼び、研究題名を述べてくれますので、小生はにこりと励ましの短かい言葉を述べることで終わります。

すべての事に神経が届いて、三四会の全体をしっかり理解しているのは菅沼安嬉子総務理事です。一言感謝を述べずにはいられない人です。もう一人あげておきます。経理を担当している末岡理事です。経理に過ちなきよう沈着、寡黙が白衣を着ています。

さて、医学部が、経営ボードの働きで沈着化することを皆で祈っています。三四会の出番は何時か、待機中です。更に、研修医の問題が出発し、医学部はこの件では更なる厳しい手続きが要求されます。ここでの三四会の役目はどうなるか、今見つめていますが、研修生への経済的な支援が求められかなり緊張しています。

そして、慶應義塾百五十年。今力を上げての協力をします。皆様本年も三四会の全力疾走をお目にかけたいと思っています。三四会全会員の皆様よろしく御支援をお願いいたします。

（済生会中央病院長　外　28回）

関連病院への関心を

関連病院会　会長　川城　丈夫

皆様　明けましておめでとう御座います。内にも外にも問題が山積した状態で新年を迎えました。今年一年皆様にとって良い年でありますように願っております。今年の四月からの初期臨床研修必修化を始め数多くの大きな波が医療界にも押し寄せてきております。その中にあって慶應義塾大学関連病院が慶應医学の発展のために、また日本の医療の向上のためにますます重要になると思っております。質の高い医療を提供する場として、優秀な人材を育成する場として、および卒業生のやりがいのある職場として、関連病院の役割がますます大きくなってきていると思います。この様な状況で慶應義塾大学医学部・病院および三四会および関連病院会が三者一体となっていることが重要であります。その意味において去年は少しかもしれませんが具体的な動きが生まれた一年でありました。それは末舛三四会長と山本前関連病院会長ご苦心により、三四会理事会に関連病院会からも出席できるようになったこと、三四会ホームページのなかに関連病院会のページが常設されたことであります。このページからはさらに各病院のホームページにリンクしております。また北島学部長の指揮により関連病院人事推進委員会が設置され去年十二月末に第一回の会合がもたれました。この委員会は学部長・病院長はじめ医学部からの委員と関連病院会からの委員などから構成されています。これにより長期的な視点に立ったより計画的な強力な関連病院人事が遂行されることが期待されます。これら三つのことは関連病院会としては誠に喜ばしいことであり、関係諸氏に感謝申し上げます。

今回の臨床研修のマッチングの結果が公表されましたが、七・三であった大学病院研修医数と研修病院の研修医数の比が、今回八・四になったとのことであります。大学病院の殆どが定員割れであり、また市中の研修病院が研修の主役であるという流れはもう止められない様相であります。有名研修病院で研修することがエリートであるとされるようになってきているとも言われています。マッチングで市中病院に流れた医師がそのままその病院に止まる可能性もあると思われます。一方最近の若い医師の博士号に対する認識が私たちの時代のそれとは変わり、博士号が必要であると考える若い医師の割合は減少してきており、彼らの考えでは学位より学会認定専門医の資格を取得することの方に力点が移っています。今までの大学の魅力の一つはこの学位にあったことを思えば、大学の求心力が低下するのではないでしょうか。従って若い医師達が戻ってきてくれるような魅力を大学はさらに付加するように変わらなければならないと思います。さらに、必修化を迎え優秀な関連病院を一つでも多くと獲得に奔走している大学もあると聞いておりますので、優秀な関連病院を多く有している慶應が他の大学から羨まれないと思います。また国立病院機構の病院となります。厚生労働省の傘下にあった時代とは人事の運びも異なってくることが十分に考えられます。これらの最近の状況を考えますと、人事についても長期的視点に立ち計画的に執行してゆかなければ、慶應が関連病院を失ってゆく可能性があります。

医学部・大学病院および関連病院を飲み込んでいる時代の流れを鑑みて、現在の信濃町の現職教授の関連病院の会への出席が少ないなど関連病院に寄せる関心は不十分と感じています。関連病院の会は信濃町キャンパスのなかで極力行うようにしております。慶應義塾の将来を見据え、関連病院により強い関心を持って下さることを期待します。

（国立療養所東埼玉病院院長　内　45回）

坂口光洋記念 慶應義塾医学振興基金 国際シンポ

「臓器微小循環・疾患制御のためのゲートウェイ」

去る十二月十二日から十三日の二日間、塾三田キャンパス北館で、第十四回　坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金国際シンポジウム『臓器微小循環・疾患制御のためのゲートウェイ』を、石井裕正教授（内　42回）がChairmanに、医化学の末松教授と理工学部の谷下一夫教授がVice Chairmenとなり、内科（消化器）教室の鈴木秀和講師を事務局長として開催した。

石井裕正教授の話　本シンポジウムは、教室の三十年以上にわたる研究テーマの一つである微小循環をキーワードに、急速な進歩を遂げているナノテクノロジーを駆使した医用工学的技術と微小循環固有の物質輸送の背景に関する最新の細胞生物学的知見の融合と種々の病態の解明や各種疾患の治療の応用を目指して、海外（アメリカ、ドイツ、イギリスなど）からの著名な研究者十四名を含む総勢二十五人の研究者に最新の知見をご披露いただきました。特に、Keynote Lecture として、ルイジアナ州立大学のD.Neil Granger教授に虚血・再灌流の微小循環について、カリフォルニア大学アーバイン校のAndrej S.Tarnawski教授に潰瘍治癒における消化管微小循環について、アリゾナ大学のRobert S.McCuskey教授に肝微小循環について、カリフォルニア大学サンディエゴ校のGeert Schmid-Schönbein教授に炎症、ショック、多臓器不全における腹部微小循環について特別講演をいただいた。これらの先生方の大学の研究室には、長年にわたり多数の教室員が留学するなどでお世話になっており、旧交も温めつつ最先端の情報交換をすることができたことは大変有意義であった。

シンポジウムでは、十二日午前には、微小血管壁および血管内成分に関する最近の進歩がナノテクノロジーレベルで論じられた。午後には、胃十二指腸の微小循環と疾患について活発に討論された。十三日午前には、肝微小循環とその臨床応用について、午後には、微小循環系における細胞接着および微小循環におけるガス状分子による調節機構について盛んな討論が展開された。一方、十二日の午後には、ポスターセッションが北館ホール前で開催され、若手研究者を中心に大勢の討論者で熱気にあふれたが、その後は、ポスター応募演題から選考された六人の演者によるプレナリーセッションも開催された。

前日の十一日の晩まで降り続いていた雨も約一〇〇人の参加者の熱気に吹き飛ばされたかのように晴れあがり、午前九時から午後六時まで、二日間にわたる活発な討論が三田の山上に展開された。

なお、第一日目の講演終了後には、綱町三井倶楽部でシンポジウム参加者を中心にレセプションが開催されたが、当俱楽部本館は鹿鳴館の設計者として知られるコンドル博士の設計によるもので九〇年前に建てられた西洋建築として格調高い建築美をいまに伝えておりレセプションは外国からの参加者にも大変好評であった。

無事成功裏にシンポジウムを終えることが出来たが慶應義塾医学振興基金の関係各位ならびに物心ともにご後援いただいた関係企業各位に深く謝意を表した。終わりに、シンポジウム開催期間中に逝去された坂口光洋先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

（教授　内　42回）

展示を見る参加者達

第72回卒後臨床研修セミナー

日　時：平成16年2月14日（土）　午後3時～6時
場　所：ホテルニューオータニ　『麗の間』
参加費：医　料

開会の辞　卒後臨床研修セミナー委員会委員長　石井　裕正
挨　拶　医学部長補佐　相磯　和雄
挨　拶　慶應医師会理事　鹿島　晴雄

講演会

『消化器疾患の最近の話題』

消化器疾患は上部・下部の消化管から肝胆膵の疾患まで含めると、その数の多さと種類の多彩さからみても、日常臨床において極めて頻繁に経験する点においても実地医家にとって最も重要な分野の一つである。

最近この分野にも新しい疾患概念の導入や疾患の成因に関する発見、さらには新薬をはじめ新しい治療法の開発など相次いでいる。

そこでおセミナーでは、消化器疾患における最近の話題を上部および下部消化管と肝炎、肝癌の分野から選択し、それぞれの専門医に解説していただくことを企画した。

本セミナーが少しでも日常の診療のお役に立てれば幸甚である。

モデレーター
慶應義塾大学消化器内科・教授　石井　裕正

1.『胃酸関連疾患（消化性潰瘍、GERD等）の基礎と臨床――最近の話題と問題点――』
慶應義塾大学消化器内科・講師　鈴木　秀和

2.『炎症性腸疾患の病態解明・治療法開発の最前線』
慶應義塾大学付属先端医療センター長 同・内科教授　日比　紀文

3.『ウイルス性肝炎診療の現況』
慶應義塾大学消化器内科・講師　齋藤　英胤

4.『肝細胞癌治療―最近の話題から』
慶應義塾大学一般・消化器外科・講師　若林　剛

挨　拶　エーザイ株式会社　代表取締役社長　内藤　晴夫

懇親会（6：00PM～7：30PM）
挨　拶　常任理事　猿田　享男
乾　杯　三四会会長　末舛　惠一

――セミナー終了後、懇親会を準備しておりますのでご歓談下さい。――

クリスマスイベント！

「サンタ企画」による入院患者さんへ音楽のプレゼント

既に恒例となっていたクリスマスイブのプレゼントとして、看護短期大学の学生ら有志の発案で音楽により入院患者さん方に安らぎの時を過して頂くための行事であるが、看護短大が閉校し医療看護学部が発足したためこの患者さんへのプレゼントがどの様な運命を辿るかが危ぶまれていた。しかし素晴らしいこの行事はやはり実現した。学校の型式は変ってもナーシングの心はすべて受けつがれていたことを示すかのように今年のクリスマスイブの音楽演奏プレゼントは例年通り行われ学生有志の集りも例年通り信濃町に出現し各病棟において演奏がなされた。既に陳旧の度が進み、薄汚れた「しみ」すら目立つ病棟においてさえも、明日の看護の継承者である看護学生達の優しく新鮮なきびきびした動きは、学生達の演奏する音色と相俟って正に本年の有終の美を飾る最高の「看護の心」を演出していたものといえる。この行事の企画に対し学生の自主的活動として認め目立たぬ形で学生達を励まし、存分に演奏活動が実施出来る様に仕向けた相川病院長はじめ教務の先生方の意図は充分に生かされたものといえよう。

この企画に際し慶應病院院長相川直樹教授は次の様に語っていた。

相川病院長の話　クリスマス・プレゼントとして学生さん達の生演奏と合唱で、患者さん方の心が癒されるひと時を差し上げることができました。毎年行いたいと思います。

（関連記事6面に）

謹賀新年
平成十六年元旦
関連病院
（掲載は名簿順）

財団法人太田綜合病院附属　太田西ノ内病院
病院長　太田　保世
電話（〇四九二）五一一一八八

国立霞ケ浦病院
病院長　西田　正人
電話（〇九八三）五〇五〇

国立療養所晴嵐荘病院
病院長　深井　志摩夫
電話（〇九二）八二一一五一

水戸赤十字病院
病院長　佐久間　正祥
電話（〇九二）三二一五一七七

茨城西南医療センター病院
病院長　高橋　正彦
電話（〇二八〇）八七八一一一

国立栃木病院
病院長　長谷川　壽彦
電話（〇二八二）三一五四一

足利赤十字病院
病院長　福内　靖男
電話（〇二八四）二一〇二二

芳賀赤十字病院
病院長　小島　正夫
電話（〇二八五）八二一二九五

大田原赤十字病院
病院長　佐々木　哲二
電話（〇二八七）三二一一二二

栃木県済生会宇都宮病院
病院長　中田　功
電話（〇二八六）六一五五〇〇

佐野厚生総合病院
病院長　大久保　充人
電話（〇二八三）二五三三

総合太田病院
病院長　新原　博之
電話（〇二七六）三一八八三

脳血管研究所美原記念病院
病院長　美原　盤
電話（〇二七〇）二四一三三五五

国立埼玉病院
病院長　牛島　康榮
電話（〇四八）四六二一一〇一

埼玉社会保険病院
病院長　鈴木　裕也
電話（〇四八）八三三一四九二

北里研究所メディカルセンター病院
病院長　石館　武夫
電話（〇四八）五九三一二二二

朝霞厚生病院
理事長　田中　次郎
電話（〇四八）四七三一五〇〇五

医療法人徳洋会　聖みどり病院
副院長　川上　伸一
電話（〇四八）八三七一〇八五五

国立下総療養所
所長　冨永　格
電話（〇四三）二九一一二二二

東京歯科大学市川総合病院
病院長　高橋　正憲
電話（〇四七）三二一〇一五一

亀田総合病院・亀田クリニック
病院長　亀田信介・亀田省吾
電話（〇四七〇）九一一二二一

国立病院東京医療センター
病院長　田中　靖彦
電話（〇三）三四二一〇〇一一